思い出の品をバーチャル空間へ

アートの現場から ACAC通信

公募によって選出された表現者たちによるアーティスト・イン・レジデンス（AIR）プログラムが9月から国際芸術センター青森（ACAC）で始まりました。新型コロナウイルス感染症対策として9月中は臨時休館となった当館ですが、リモートで実施しているインド拠点の服飾デザイナー、カロル・ダッタによる活動と、県内を拠点とする内田聖良の滞在制作が進行中です。

内田は「ポストインターネット時代のベンダー」と名乗るアーティストです。「ベンダー」とは曲げるものを意味する言葉ですが、電子工作で使われる「サーキットベンディング」は既に設計された回路をわざとショートさせたり、別のものに作り変え楽器などにしてしまう方法で、彼女の肩書の由来になっています。例えば《余白書店》と題されたプロジェクトでは、私たちが日常的に買い物をするアマゾンを作品発表の場として利用しています。内田はそこで書き込みや傷みなどがありアマゾンなどの流通サイトでは価値がないと見なされてしまう古本を、むしろ人の手による創作的行為が施された一点物の作品として価値づけ、再流通させ捉え、価値を付与することを試みています。また2016年から秋田に移住したことをきっかけに（2021年から青森市拠点）東北地方に数多くある民話や信仰にも興味を持ち、そこから人の欲望や感情の根源的なあり方とモノの関係を考察し、制作にも取り入れようとしています。

今回内田がACACに約3カ月滞在して取り組むのは、色々な人の思い出のモノや処分できない一品をインターネット上のアイテムとしてバーチャル上で供養するプロジェクトです。3Dスキャンの方法を用いてアイテム化するのですが、単純な形をしたもので数十枚、複雑な形のものに至っては何百枚もの写真を撮影することで精度の高い立体的な形が得られます。この過程こそ非常にストイックで、喪の作業のようにも思えます。

内田は青森で生活する中で、目に見えないものを信じることや形に表し記念／祈念する文化の存在を強く感じたと言います。死者を供養するかたちが可視化されている川倉賽の河原地蔵尊や、釈迦（しゃか）の墓があると云われる梵珠山などに足を運び、行為や伝説の本質を見極めようとしながら、青森の方々の思い出の品とそのエピソードを収集しています。個人的で一見他者には理解され難いと思われる物事も、バーチャル上で匿名性を保ちながらアイテムとして流通させることで思わぬ共感が生まれたり、逆に客観的に見られる状態になることで気持ちの整理がつくかもしれません。思い出の品は返却も可能です。ご興味のある方はお気軽に国際芸術センター青森（☎017-764-5200、メールacac-1@acac-aomori.jp）までご連絡ください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　慶野結香）

※第1金曜日掲載

3Dスキャンをする内田聖良